

國學院大學博物館 国際シンポジウム・ワークショップ 2015 「博物館の国際的ネットワーク形成と日本文化研究」

2015年12月12日（土）、13日（日）の2日間にわたり、國學院大學博物館主催で「博物館の国際的ネットワーク形成と日本文化研究」と題する国際シンポジウム・ワークショップが開催され、日本文化研究所スタッフも運営に関わった。

この企画の趣旨は次のとおりである。

海外の博物館における日本の資史料、美術の展示は、その国の日本文化研究、教育のまさに最前線であるといえる。2009年に大英博物館で開催された『The Power of DOGU』展は、連日多くの来場者で賑わい、これまで日本の縄文土偶になじみのなかった人々にも、広くその文化的価値を伝えることになったことは記憶に新しい。

そうして日本文化への興味を抱いた人々が、さらに資料の理解を深め、日本文化の理解へと歩みをすすめていくためには、展示で完結するのではなく、もう一步踏み込んだ工夫を提供することが必要だろう。

その有効な仕掛けの一つに、日本の専門的な博物館とのオンライン上での提携が挙げられる。

今回のシンポジウムでは、海外で日本関連の資料を展示、研究している博物館から担当の学芸員を招き、それぞれの博物館の現状を報告し、日本の博物館にどのような情報発信を求めるかを発題していただく。その上で、日本側のパネリストたちと討議を行い、情報化時代といわれる現代の状況にもとめられる博物館の国際的ネットワークのあり方を展望する。

この趣旨に賛同し、国内外から多くのパネ

リストが参加し、討議を盛り上げて下さった。シンポジウムに先立ち、12月11日にはフィールドトリップとして、春画展でにぎわう永青文庫、國學院大學博物館、そして本博物館と連携している山種美術館、東洋文庫を訪問した。これらの美術館、博物館をともに参観す



永青文庫



國學院大學博物館



東洋文庫

ることで、互いの問題意識を事前に共有することができたように思う。

12日のパネリスト、コメンテーター、司会は次のとおりである。

12月12日 国際シンポジウム

【パネリスト】

マティ・フォラー Matthias Forrer (ライデン国立民族学博物館、オランダ)

サイモン・ケイナー Simon Kaner (セインズベリー日本芸術研究所、イギリス)

ミシェル・モクエール Michel Maucuer (ギメ美術館、フランス)

アン・ニシムラ・モース Anne Nishimura Morse (ボストン美術館、アメリカ)

アレクサンダー・シニーツィン Alexander Sinitsyn (ピョートル大帝記念 人類学・民族学博物館 [クンストカメラ]、ロシア)

【コメンテーター】

井上洋一 (東京国立博物館)

【司会】

中牧弘允 (吹田市立博物館、国立民族学博物館)

12日のシンポジウムでは、海外の比較的

大きな博物館・美術館を中心とした日本文化の展示について発表が行われた。こうしたテーマは必然的にその国の日本学の歴史とも深く関わることになる。とくにオランダは日本と長い外交関係を築いてきた。シーボルトコレクションはその代表であろう。このように各国のコレクションの形成過程が、その国と日本との関係のあり方を反映していることをあらためて感じた。

12月13日のワークショップの登壇者は次のとおりである。比較的小規模な博物館、美術館の情報化、国際化への取り組みに関する報告や研究者の立場から博物館、美術館の収集資料をどう活用してきたか、あるいは今後はどのような展望があるか、などの点が議論された。

【パネリスト】

イローナ・バウシュ Ilona Bausch (東京大学)

クリストフ・マルケ Christophe Marquet (国立東洋言語文化大学、日仏会館、フランス)

ヨハネス・ヴィーニンガー Johannes Wieninger (オーストリア応用美術博物館、オーストリア)



オランダ、マティ・フォラー氏と司会の中牧弘允氏



左から：三宅秀和氏、内川隆志氏、宮崎克則氏、イローナ・パウシュ氏

内川隆志（國學院大學）
岡崎礼奈（東洋文庫）
三宅秀和（永青文庫）
宮崎克則（西南学院大学）
山崎妙子（山種美術館）

【司会】

笹生衛（國學院大學）

比較的小規模な博物館の場合、とくに多言語への対応については人材の点から難しいという現状などが報告された。にもかかわらず、展示内容によっては多くの外国人が訪れることもあるため、わかりやすい表現を工夫する試みなどが紹介された。

今回のシンポジウム、ワークショップについては、すでに報告書が刊行されており、下記のサイトから閲覧が可能である。

<http://museum.kokugakuin.ac.jp/files/user/symposium2015report.pdf>

日本に関する展示を行っている著名な海外の博物館、美術館の担当者が、これだけ一堂に会する企画を國學院大學博物館主催で行うことができたということは、奇跡的な出来事と言ってよいだろう。その背景には、これま

で本学の考古学の研究者や日本文化研究所が築いてきた国際的な研究者ネットワークがあったからこそと考える。とくに日仏会館・フランス国立研究センターのクリストフ・マルケ所長（当時）が、いち早く企画に賛同し、後援を引き受け、すぐにフランスのギメ美術館の館長に直接連絡を取って協力を得て下さったことは、その後のほかの方々との交渉を順調に進める大きな推進力となった。

国際的なネットワークは、一朝一夕に築けるものではない。しかし、今回の企画をきっかけにこれまでの絆がさらに強まり、また新たな関係を築くきっかけになったことは確かだと思う。

ほかの参加者にとっても、今回の企画がそのように実りあるものになったであろうと願っている。

最後に、フィールドトリップにはじまる2日間のシンポジウム、ワークショップの実施に当たっては、國學院大學博物館の職員をはじめ研究開発推進機構の教員、事務課職員総出でご協力いただいた。ここに篤く御礼申し上げます。

（平藤喜久子）